敦道親王の無常感と宗教的心情

森田兼吉

和泉式部の恋人である、冷泉天皇の第四皇子帥宮敦道親王の伝については、すでに何度か述べたことがある。[1] ここでは帥宮が青年期に邂逅したいくつかの死と、おそらくはそれらによって助長されたであろう帥宮の無常感や宗教的心情について論述したい。

二歳で母を喪った帥宮は、幼少の頃から多くの肉親の死に出会ってきた。帥宮が五歳のときに異母姉尊子内親王が二十歳で、六歳のときに異母姉宗子内親王が二十三歳でと、姉達はいずれも早く世を去った。[2] 母にかわって宮をいつくしみ育ててくれた祖父兼家は十歳のときに薨じ、義父であり、第二の庇護者であったおじの道隆も十五歳のときに薨じている。そして青年期にも、二十歳の前後に、太皇太后宮昌子・東三条院詮子・兄弾正宮為尊親王など、身近で大切な人々の死に次々と出会わなければならなかったのである。

昌子は朱雀天皇の一人娘であり、帥宮の父冷泉院（当時東宮）御元服の夜に添い臥しとして参った。東宮と同年の十四歳であった。冷泉院が即位された康保四年（九六七）の九月四日に立后したが、御子を一人も産むことがなく、後から入内した伊尹の女懐子や兼家の女（帥宮の母）超子に押された形であった。

上の御ものゝけの恐しければ、この宮も里がちにぞおはしましける。

（月の宴　日本古典文学大系本P五四）

と栄花物語は記している。冷泉院の御狂疾の故に里がちであったというのだが、諸記録に散見する、優しく、卑屈なまでに他人の心をおもんばかる宮の性格からして、みずから身を退いた形と見るべきかもしれない。しかし冷泉院の后妃としては、懐子や超子がなくなり、師輔の女怤子が尼になった後までも院に仕え、内親王という身の程や人柄・信仰の篤さもあって世人の尊敬を受けていたようである。

昌子の病気については、太皇太后宮大夫であった実資の小右記に、長保元年（九九九）八月二十八日に「参宮、頗有悩御気、権僧正観修候加持」とあり、以後一進一退しながら病勢の進んでいくさまが詳細に記されている。十月十二日の「宮御書」によれば、「両三年御悩不平」であり、数年来の病であった。そしてその書状には、御占が頻に他処に移る可き由を勘申したけれども心に憚る所有って口

に未だ出しては言わなかったこと、しかし苦悩之間人の難を思わず大進雅致宅が宮を去ること遠からず彼宅に渡りたいと思うが如何と書かれてもいた。実資も賛成し、二十五日に大進大江雅致宅――実は権大進橘道貞宅――に行啓する。大江雅致は和泉式部の父であり、橘道貞は和泉式部の夫である。雅致はその宅の提供を太皇太后宮から乞われたものの、手狭であるなりなんなりの事情があって、配下でもあり娘の夫でもある道貞宅を借用したのであろう。居は移したものの宮の病勢ははかばかしくなく、十二月一日についにそこで崩じた。出家剃髪して眼を閉じ、名香を手に盛り、西方に向って弥陀の宝号を唱えながら最期を迎えたことを、女房が実資に語っている。春秋五十であった。二日、遺骸は宮の建立にかかる石蔵の観音院に移され、五日に葬送が行われた。冷泉院は二日に弔使を送っている（小右記）が、遺令によって日次を避けていたため、太皇太后宮大夫の実資が崩御と遺令を正式に奏上したのは葬送の当日になってであり、権記の筆者行成も五日になってはじめて崩御の報に接している。

遺令には、葬儀には公物を費さず凡人の例によること、火葬にしないこと、山陵を営まないこと、国忌としないこと、素服を着用しないこと、喪によって神事や節会を停止しないこと等、人柄をしのばせる細々とした配慮が記されていた。その遺令の他に、

又御存生之時仰去、御悩之間依陰陽家申、避本宮遷御権大進道貞宅、道貞雖為宮仕、非旧仕之者、依病避宮之間、暫以移住、若有非常、極可不便、先例三宮暫住他家之時、臨時加賞家主、已有其数、若可然可令奏事由、其後不経幾日崩給。

（権記　五日）

という配慮のなされているのも目を引く。たしかに道貞は旧くから仕えていた者ではない。二ヵ月ほど前の九月二十二日、大進雅致は実資を訪い、宮の病状を伝えると共にいくつかの宮の仰言を伝えているが、その中に、

又仰云、和泉守橘道貞可請権大進、即欲令奏其由者、（小右記）

とある。もちろん雅致のとりなしであろう。翌二十三日から二十五日にかけて京宮の除目があり、そのときに道貞は権大進に任じられたものと思われる。宮は前述のように十月十二日には大進の雅致宅への移居を望まれており、それが実際には新任の道貞宅となったため、重病の中でありながらかくまで念入りな配慮をなしたのであろう。五日の小右記は、道貞に「可給臨時給事」と葬儀その他についての遺令の伝奏の記事の後に、

冷泉院御弔使至道朝臣、件御使帥宮、内大臣同加詞、太奇恠事也、似便消息、

とあって帥宮の名が見える。「件御使」というのはわかりにくい表現だが、冷泉院の御弔使は藤原至道であるから該当しない。天皇の御弔使というのも、その言い方や、「内大臣同加詞、太奇恠事也」という後文の実資の批判から見て成立しない。結局これは道貞に臨時の給を与えるための勅使であったと理解されよう。このとき実資は石蔵の観音院にいて葬儀の準備の指揮に当っていた。「件御使」云々の記事は伝聞として描かれてはいないから、帥宮も石蔵に来たものと思われる。和泉式部の伝記研究では、この年の春和泉守に任ぜられたと見られる道貞と和泉式部の和泉国下向の時期が問題となる

が、少くとも昌子崩御の前後道貞は在京しており、家主としていろいろ宮の世話をし、五日にも石蔵にあって葬儀のためにつとめていたのであろう。そうでなければ、昌子の道貞に対する異常なまでの配慮や臨時給を給う御使として帥宮が石蔵に行き、内大臣公季までが詞を添えて実資の首を傾けさせた理由がわからないのである。

与謝野晶子氏[3]の提唱以来、弾正宮や帥宮が昌子を継母としていたと説かれることが多い。しかし、阿部秋生氏[4]が指摘され、わたくしも論じたことがあるように[5]、昌子を帥宮達の継母と考えることはできない。とはいえ、冷泉院の后として昌子がその皇子達の身を案じ、あたたかく見守っていたであろうことは想像にかたくない。ことに昌子は人一倍万事に気を配る女性であった。さきに示した遺令にしてもそうだが、小右記を見ると、重病中の昌子内親王の他人への気の配りようがさまざまに読み取れて胸の痛む思いさえするのである。

道貞への御使として石蔵へ赴いた帥宮は、そのまま葬儀に参列したであろう。帥宮が昌子の崩をどのように受けとめ、どのような思いで葬儀に列していたかは知るよしもない。ただここに帥宮は貴重な同情者の一人を失ったわけであり、そのことは痛感せざるをえなかったであろう。

翌長保二年正月、弾正宮と帥宮とは修正月を営んでいる。

従大内参院、修正月、於新作被初修、（御堂関白記　四日）

仍更参院、今夜安唐〈曙カ〉文殊像於新堂被行正月、左大臣右大将宰相中将被候、（権記　四日）

弾正宮、帥宮、修正月、参会給上達部多、（御堂関白記　九日）

申剋参院、依左府命調埦飯、亦備菓子廿折櫃、入女房、弾正親王、帥親王、右大臣被参会、自余卿相殿上人等亦多参、修正之間依御坐新堂也、（権記　九日）

入夜参院、修正月結願、（御堂関白記　十日）

修正月の行われたのは、権記の院は通常東三条院詮子をさすから、その御所であろう。そこに新しく作られた仏堂に文殊菩薩像が安置され、修正月が行われたのである。九日の権記の記述によれば弾正宮と帥宮は単なる参会者のようだが、同日の御堂関白記を読むと、少くともこの日は弾正宮と帥宮が主催者的な立場にいたことがわかる。修正月は修正会ともいい、「母年正月に旧年の悪習を正し、その年の吉祥を祈る各寺院で行われる法会。（中略）平安中期以後は諸大寺で行われた。通例七日間であったが時代や寺により異なった」（中村元氏監修　新・仏教辞典）とされるものだが、新堂があるにせよ、このような場所で行われるのは珍しい。もちろん道長の強力な後援のもとに行われたもので、帥宮達の主催になる九日は道長はとくに意を用いたらしく、行成のように埦飯の調達を命じられた者もおり、参会者も多かった。この修正月はおそらくは昌子の崩御と無関係ではあるまい。帥宮達に一日があてられたのは、昌子の崩御によって冷泉院の周辺にきざした暗雲を懸命に払いのけようとするものであったであろう。正月十九日は昌子の七々忌。御堂関白記に「冷泉院并宮宮有諷誦」とあり、この「宮宮」には帥宮も加わっていたに相違ない。

昌子崩御の翌々年、長保三年（一〇〇一）の閏十二月二十二日に

は、帥宮達の継母的な存在であったと思われる[6]東三条院詮子が崩じた。十月には九日を中心に道長の土御門邸で四十の賀が盛大に行われたばかりであった。一条天皇の行幸を迎えての賀の日の模様は小右記・権記・栄花物語（とりべ野）等に詳述されていて名高いが、「親王、公卿、殿上人等禄有差」（小右記十月九日）という中には帥宮もはいっていたはずである。弾正宮の参席していたことは同日の権記に「弾正親王被参」とあるのによって知られる。権記の九月十八日の条には、院（東三条院）御悩と聞いて行成が「乍驚」参じたところ「兵部大輔示、御悩甚重、諸僧等奉加持、頗宜座者」とあって、賀の前から病気がちであったらしいが、閏十二月になると急に悪化したようで、八日あたりから御悩の記述が連日権記に見える。十六日には御見舞の行幸があり、この日に剃髪、翌日阿部晴明等の占によって藤原行成宅に渡御、一日で還御、二十二日に崩じたのである。以上、小右記と権記によって記したが、行成宅渡御の前後のことを栄花物語（とりべ野）は次のように記している。

宮の渡らせ給をば、御車かき下して、御殿籠りたる御座ながら、殿の御前・弾正宮など舁き載せ奉らせ給て、やがて殿御車には候はせ給。かしこにも御車かき下して、同じ様にて下し奉らせ給。帥宮・弾正宮夜昼扱ひきこえさせ給へば、同じくやがて皆仕うまつらせ給へり。この宮達は御甥ばかりにおはしませど、内の御有様にさしつぎて扱ひきこえさせ給へる御心ざしの程を思ほし知りて仕うまつらせ給て、涙に溺れさせ給へり。

（P二三一～二）

この文は、詮子が実子一条天皇についで弾正宮と帥宮を愛し、帥宮達も率先して詮子の世話と看病に当たっていたことを語っている。ただし、後述するように弾正宮はこの頃すでに発病しており、詮子の寝たままの御座を舁き載せるようなことをしたかは疑わしい。この文からは、詮子と帥宮達との愛情の交流を読み取ればじゅうぶんであろう。詮子は院号の由来のように多く東三条邸に住んだ。帥宮はその東三条院の南院に住んでいた[7]から、平素から親しむ機会は多かったはずである。このような仲の詮子であるだけに、その崩御は帥宮達の心をひどくうちのめしたことであろう。そしてここに帥宮は身近な敬愛する女性のすべてを失ってしまったことになる。

この頃、帥宮の兄弾正宮もすでに病んでいた。権記の長保四年六月十五日の記事には、「去年冬十月受病之後、数月懊悩」とあり、詮子の四十の賀に参席した後あたりから発病したものと見られる。ただ、十月、十一月と行成は足しげく弾正宮を訪うているが、権記に御悩の記述はない。十二月十四日から法興院で行われた東三条院詮子の不断念仏会の結願の日（十六日）、権記には「四皇子、三公、春宮大夫、右衛門督被参」とあるから、帥宮と共に弾正宮も参入している。十七日の夜から清水寺に籠っているが、「被行修法」と権記は記し、この行文から垣間見うる弾正宮は明らかに病んでいる。この頃までは、念仏会に参じたり、清水寺に詣でたりするだけの体力は一応有していたことになる。石山寺には二十五日まで参籠している。そこで宮はむしばまれつつある己が肉体への不安を一心に仏にうったえ、祈っていたのであろう。

弾正宮の病状は翌春から次第に悪化して行った。以下権記によって記すが、三月十四日には前大僧正観修が邪気の加持を行ってい

る。四月二十九日夜には「甚不覚御座」という状態にまでおちいり、五月六日には和気正世が腫物に針をしたところ「膿汁一斗」の有様であったという。一斗は多量の意の誇張表現であろう。六月五日にはついに剃髪、長保四年（一〇〇二）六月十二日に薨じた。帥宮より四歳年長の二十六歳であった。

栄花物語（とりべ野）は弾正宮の死について、

弾正宮うちはへ御夜歩きの恐しさを、世の人安からずあいなきことなりと、さかしらに聞えさせつるに、今年は大方いと騒がしう、いつぞやの心地して、道大路のいみじきに、ものどもを見過しつゝあさましかりつる御夜歩きのしるしにや、いみじうわづらはせ給ひて、うせ給ひぬ。（P二三四）

と記している。栄花の記述どおり、長保二年冬から長保三年七月にかけて疫病が大流行し、「道路死体不レ知二其数一、況於二斂葬之輩一、不レ知二幾万人一」（日本紀略、長保三年年末）という程であった。富士川游氏の「日本疾病史」はこれを痘瘡の流行と解しており（P一〇八）、腫物など弾正宮の症状にもそれと通うものもあるが、疫病とのかかわりはさだかにしがたい。十八日雲居寺で葬送。

注目されるのは、この頃帥宮のもう一人の同母兄である東宮居貞親王も重病に苦しんでいたことである。

左府参東宮、々々重悩給也、候御供、（権記　五月四日）
長保四年五月五日、東宮御悩事、（小右記目録）
大夫令申云、宮御悩甚重云々（権記　五月七日）
長保四年五月十二日、東宮御悩危急事、（小右記目録）
与権尚書参東宮、々々御悩云々（権記　六月二十三日）

弾正宮の腫物から膿汁一斗という頃、東宮も生死の境をさ迷っていたことになる。そして、この前後、二人の女性の急逝が世間を騒がせている。

故関白殿四君亡給也、（権記　六月三日）
臨昏為文朝臣来告、淑景舎君於東三条東対御曹司頓滅云々、聞悲無極、（権記　八月三日）

淑景舎は故関白殿道隆の二の君だからこの二人は姉妹である。帥宮から見れば、別れた妻（道隆の三女）の姉と妹とであり、彼女達とはおそらくは同じ東三条院で育ち、帥宮の元服と彼女達の裳着は同日に同じ邸内で行われた[8]。実際にどの程度の交際があったかはわからないが、きわめて身近な存在であり、関心も深い女性達であった。四の君は一条天皇の御匣殿であり、天皇の愛を受けて懐妊していたが、「俄に御心地重りて、五六日ありてうせ給ぬ」と栄花物語（はつはなP二四二）は記している。「御年十七八ばかりにやおはしましつらん」（同上）という若さであった。二の君淑景舎は東宮の女御で、栄花（とりべ野）には「御鼻口より血あえさせ給て、たゞ俄にうせ給へるなりけり」（P二三五）とある。宣耀殿女御かその身辺の者の毒殺説までささやかれるほどの、唐突で異常な死に方であった。

このうち続くいくつもの死や病は二十二歳の帥宮の心に大きな衝撃を与えずにはおかなかったはずである。二人の、そしてその二人だけしかいない同母の兄達はそろって生死の境をさ迷い、ついに弾正宮は死に奪われて行った。それに前後する道隆のむすめ達の突然の死。淑景舎君原子の死に場所は東三条院東対であり、その南院に

いた帥宮の驚きは大きかったろう。帥宮の心には、死者をいたむ気持と同時に、死というものについての不安と怖れ――近しい人達に次々と襲いかかり、残酷にもかれらを確実に死へと連れ去って行く、わけのわからない何物かについての、言いようのない恐怖がうずまいていたであろう。それはいつわが身を襲って来るかもわからないのである。冷泉院の狂気や母超子の急逝の折に噂されたような悪霊のたたり[9]ということも当然考えざるをえなかったであろう。現に、本朝世紀八月十四日の条には次のような記述が見られる。

此日戌刻皇太子自東三条院遷御大夫大炊御門第、自去春比有御悩事、有可遷御他所議之間、更衣藤原子（淑景舎）今月三日頓滅、弥依有怖畏、遂以遷御云々

ここでは東宮とその周辺の人々は明らかに悪霊への畏怖におのいているのである。それは帥宮についても同じであったろう。その悪霊は東宮や帥宮をねらうものとして受け取られていたに相違ない。原子の死の五日後の八月八日夜、帥宮邸に盗人がはいった。

去夜盗人入帥宮云々、
詣帥宮、今朝慮外事候由雖有承旨、朝間聊有所障、不早参之由、令申、返命云、無直衣不相逢云々、（権記　八月九日）

翌日見舞に参じた行成に「直衣がないので逢えない」と帥宮は答えさせている。盗人の被害が大きかったとしても、直衣が一枚もないなどとは考えにくく、いかにも口実くさい。ここからわれわれは、うち続く死との出会いによってすっかりうちのめされ、今また慮外の不祥事によって呆然としている。傷心の帥宮の姿を読み取るべきであろう。弾正宮の死について栄花物語（とりべ野）は「東宮もいみじうおぼし歎く。帥宮もいみじうあはれに口惜しき事におぼし歎くべし」（P二三四）と記すが、東宮にせよ帥宮にせよその心情はもっと複雑なものであった。

弾正宮の四十九日の法事は八月一日に法興院で盛大に行われた。読経の料として「本家二百端、御誦経、冷泉院二百端、使季随朝臣、花山院百端、使公誠、東宮二百端、使大進景理、帥宮百端、左大殿二百端」（権記）が施入されたが、読まれるとおり、冷泉院、花山院、東宮はみずからは参列せず使者だけであり肉親の参加者は帥宮だけであった。弾正宮の死に「よにうせじ。よく求めばありなんものを」（栄花、とりべ野、P二三四）と反応したという狂気の冷泉院と、病床にあったであろう東宮は参席しうべくもなかったのであろう。帥宮はどのような思いでこの法会に出ていたのであろうか。法会を終えて東院に戻った弾正宮の北の方は法橋覚運を戒師として尼となった（権記）。原子が急死したのはこの翌々日のことである。

弾正宮に仕えていた者の何人かは、宮の亡きあと帥宮に仕えるようになったらしい。和泉式部日記に見える小舎人童や右近尉（萩谷朴氏[10]は藤原親業だと推定しておられる）はそういう人達であり、そろって重用されているのが目をひく。帥宮の弾正宮に対する気持ちの一端はこんなところからもうかがえそうである。

翌長保五年四月、帥宮はその小舎人童に橘の花を持たせて和泉式部を訪わせた。和泉に（以下和泉式部日記の本文は、寛元本系の飛鳥井雅章筆本を底本とし、三条西家本と応永本系の京大本によって

訂しうるものは訂した。(11)なお吉田幸一氏の「和泉式部全集　本文篇」の該当個所のページ数を付記した）

などかいと久しうみえざりつる。とをざかるむかしの名残にはおもふを。　（P二）

★　か、底本ナシ、拠両本。
★★みえ、底本こ、拠両本。

と問われて、小舎人童が

A そのことゝさぶらはではなれ〳〵しきやうにやとつゝましうさぶらふうちに、B 日ごろ山寺にまかりありきはべりてなむ。C いとたよりなくつれ〴〵におぼえ侍しかば、御かはりにも見たてまつらんとて、帥の宮になんまいりて侍。　（P二）

★　う、底本く、拠両本。
★★　ち、底本へ、拠両本。
★★★　つれ〳〵に、底本ナシ、拠両本。
★★★★かはり、底本ゆかり、拠両本。

と答えているのは、重要な事実を語っている。

小舎人童のこのことばは、一読して明らかなように、ABCの三つの部分から成り立っている。Aは小舎人童が「いと久しう」式部宅を訪わなかった一般的な理由で、Bはそうした中で生じた「日ごろ」の特殊事情による御無沙汰の理由である。Aはまず問題がない。Bも普通には問題にされたことはないが、「日ごろ」の意味と山寺歩きの実態の究明とは特に取り上げて論じなければならないものをもっているのである。「日ごろ」の意味としては、従来の注釈書では、

1　ここ数日、数日来。
2　この頃、近頃。

という二種類の解が行われている。1は、宮田和一郎氏の講義、竹野長次氏の新釈、尾崎知光氏の考注などの所説であり、2は、全訳王朝文学叢書をはじめとして、玉井幸助氏の新註、川瀬一馬氏の新註国文学叢書学生版、鈴木一雄氏の全講、藤岡忠美氏の日本古典文学全集、狩野尾義衛氏の新釈など数が多い。ところでこの二つの解では、2の方の正しいことは容易に論証しうる。小舎人童は大変長く無音であった理由の一つとしてBの事実を述べているのであって、「ここ数日来山寺に……」というのでは、無音を長く続けていた理由にも弁解にもならないのである。

次に「山寺にまかりありきはべりてなむ」という文について考えてみよう。ここについて玉井幸助氏は、新註において「故宮の菩提所なる山寺に籠つてゐたのであらう」と指摘しておられる。たしかに弾正宮とのかかわりで「山寺」を読み取るのが最も素直であろう。前述のように弾正宮の葬儀は雲居寺で行われており、まずそこが菩提所と見られる。雲居寺は東山にあって今の高台寺の地にあり、そのころは山寺とよばれてもよい所である。しかし、「日ごろ山寺にまかりありきはべりてなむ」という言い方は、前述のような「日ごろ」の意味からしても、特定の一つの寺に参詣・参籠していたという表現ではない。近頃はあちらこちらの山寺を参詣・参籠してまわっているという表現なのである。――ここまで読みを深めて来ると、小舎人童の背後に帥宮の姿がくっきりと浮かんでくる。今は帥宮に仕えている小舎人童が、旧主人の菩提を弔うためであったにせ

よ、そして今の主人が旧主人の弟宮であったにせよ、たとい数日であっても、一人気ままに山寺歩きに行くはずも行けるはずもなかった。まして、かなり長期の間にたびたびということであればなおさらである。それは、帥宮の御供をしてのしばしばの山寺詣でに相違ない。そしてこう考えてはじめてBとCの文は密接なつながりを有するものとなる。Bを承けて「……と申しますのも、実は、わたくしはこれこれのわけで帥宮様に参上しているのでございます」という係わり方で表現したのがCなのである。結局この文からは、小舎人童がどうしたこうしたということ以上に、この日ごろ山寺歩きに精を出している帥宮の姿をこそ読み取るべきであろう。その山寺歩きが亡き兄宮の菩提を弔うためばかりでないことは、これまでの考察の結果からしてまず確かである。目まぐるしく立ち現われ、襲ってくる死が、えたいの知れぬもののけへの恐怖が、帥宮の、当時の人々の常として抱いていたであろう無常感をいっそうつのらせ、その心の仏道への傾斜を強めていったものと思われる。山寺も雲居寺とは限らない。昌子が建立し、その墓所ともなった石蔵の観音院なども、たとえば小右記の長保元年十二月二日の条に見える道長の書状には「山寺」とあるし、観音院のある大雲寺が近時源氏物語若紫の巻のあの「北山」の「なにがし寺」のモデルだといわれることもあって、すぐ心に浮かぶ。観音院は帥宮が作文の会を催したこともある所である。[19] 源氏物語賢木の巻では雲林院も山寺とよばれ、蜻蛉日記にしばしば出て来る山寺は鳴滝の般若寺と推定されている。母超子や詮子の墓のある木幡も含めて、候保地はいろいろ考えられよう。そうしたいくつかの寺々をめぐっては参詣したり参籠したりする日々を、帥宮は送っていたのである。弾正宮や詮子、さらには遠い昔に亡くなった母などさまざまの縁者の菩提を弔い、わが身や東宮の身の、そして父冷泉院の身の安穏を祈る日々を帥宮が送っていることを小舎人童のことばは示唆しているのである。

和泉式部の前に登場して来る帥宮はこうした背景をもっていたのである。そして、帥宮のこうした仏道への傾斜を考えに入れなければ、和泉式部日記には理解しがたいところがある。

和泉式部日記で、帥宮が和泉式部を自邸へと誘い、不安とためらいの連続の中で和泉が南院入りをようよう決意した頃、帥宮は突如、

その夜おはしまして、例の物はかなき御物語せさせ給ても、かしこにゐてたてまつりてのち、まろがほかにもゆき、ほうしにもなりなどして、みえたてまつらずば、ほいなくやおぼされんずると、心ぼそくのたまはするに……　（P八四）

★　も、底本もし、拠両本。

★★　のち、底本ナシ、拠両本。

★★★ゆ、底本い、拠両本。

と出家の可能性をほのめかし、女を驚かせていっそうの不安におとしいれている。式部の、

「つく〴〵となげくけしきを御らんじて」

なほざりのあらましごとによもすがら　（P八五）

と歌い、翌朝贈られた式部の、

うつゝにて思へばいはむかたもなしこよひのことを夢になさばや

しかばかり契りしものを定なきさはよのつねにおもひなせとや

（P八六）

★せと、底本さは、拠両本。

という歌に対して、

うつゝともおもはざらなむねぬる夜の夢にみえつゐうきご

とゞもは、

思ひなさむと、心みじかや。

ほどしらぬ命ばかりぞ定なき契りしことはすみの江の松

あがきみや、さらにあらましごときこえじ、ひとやりならぬも

のわびし。

（P八七）

★　も、底本は、拠両本。

★★　むと、応本なんあな、ニョルベキカ。

★★★　そ、底本に、拠両本。

★★★★さらにあらましこときこえし、底本あらましごと

に、従応本。条本あらましごとさらに〳〵きこえ

し。

と答えているのも注意される。「なほざりのあらましごと」だといい、「夢にみえつるうきごとゞもは」といい、しきりになぐさめているのだが、二人の契りの永久不変を誓うのに、わざわざそれと対比させて「ほどしらぬ命ばかりぞ定なき」といっているのである。むろんこのような場にふさわしい表現ではないだろう。それなのにこう表現したのは、いやこう表現しなければならなかったのは、帥宮の心の中に命の定めなさが濃いかげを落していたからにほかなるまい。そのことの表白ぬきでは、うしろめたくて、とても「契りしことはすみの江の松」などとは誓えなかったのに相違ない。出家の素志の表白と共に、死への不安がはじめて間接的にではあるが語られているのである。この帥宮の死への不安は、

いかにおぼさるゝにかあらん、心ぼそきことゞもをのたまはせて、なをよの中にありはつまじきにやとのたまはせたれば、

くれ竹のよゝのふるごとおもほゆる昔がたりは君のみぞせ

む

と聞えたれば、

呉竹のうきふししげき世中にあらじとぞおもふしばしばか

りも

（P九〇・九一）

★　に、ことに、拠底本。

★★　に、底本の、拠両本。

★★★君のみそ、底本及条本われのみや、拠応本及和泉式

部正集。

という日記の最後の贈答歌の部分ではっきり前面に押し出されて来る。ここにうかがわれるのは帥宮の明確な死の予感なのである。それも、口に出さずにはいられないほどの怖れをともなったものであったのであろう。そしてここに至れば、帥宮の出家の素志が死の予感や怖れと密接に結びついていることは、疑いようのない事実として浮かび上がって来る。

帥宮の出家の素志の表白は、木村正中氏のいわれる[14]ように、「この宮の言いぐさは、いまや女を迎え入れようとしている男の側の言葉として、まことに異様である。あたかも女を故意に失望させようとしているかのごとくさえ聞える」ものである。ただ、日記の流れ

からは唐突なものではあっても、和泉式部との恋愛以前から帥宮が道心（仏道への志向）を有していたと考えることによって、帥宮のこのことばは理解することができる。[15] その道心がどのようなものに由来するかについては、大橋清秀氏は[16]「わたくしは帥宮の出家の志は母を早くうしない、長保四年（一〇〇二）六月十三日に兄為尊親王の急死にあったための無常感と、道長の政権が着々ときずかれている摂関政治における自己の限界を知って、公的生活に望みを失われたからではないかと考えているのである」と述べておられる。この結論に至るまでの分析から見て、大橋氏は二つの原因の内の後者に重点を置いて考えておられるようだが、母と弾正宮だけに限らず、めまぐるしいまでに帥宮の周辺に襲いかかる死と悪霊への恐怖によって助長された無常感の方に、より大きな原因があったとすべきであろう。帥宮を取り巻く政治的状況については、わたくしも多少分析してみたことがあるが、[17] 長保五年当時、道長にとって帥宮は政治的にもまだまだ貴重な存在であった。そして、みずからを取り巻く政治的状況の中で、帥宮がどのような（政治的）望みをもっていたか、あるいはいなかったかは、その内面にふみ込んで、今後詳細に検討すべき課題であるが、今のところわたくしは、帥宮には政治的な野心はほとんどなかったと考えている。

長保五年の四月の頃、帥宮はしばしば山寺に参詣・参籠していた。強い無常感が帥の宮の心に広がり、死の予感と恐怖がその心をいっぱいにしていた。出家をしたいと思ってもいたであろう。その帥宮が、兄弾正宮の恋人であった、男出入りも多い和泉式部に、わざわざ橘の花を贈り、交情のきっかけを求めているのである。それは一見奇妙なことであり、矛盾する心情のようにも思われよう。しかしながら、仏道への志向と和泉式部への心の傾斜とは、この日記では、何度も何度も、深く結びついたものとして語られているのである。

帥宮がはじめて式部を訪おうとしたとき、

かたらはゞなぐさむことも有やせんいふかひなくはおもはざらなむ

あはれなる御物語きこえん、★くれにはいかゞ。（P五）

★くれにはいかゞ、底本忍びてくれには、拠両本。

という文を贈っている。この「あはれなる御物語きこえん」は、与謝野晶子氏の訳書が、

亡き人に就きての物語もなさばや、聞かばやと切に思はれ候。

と思い切った意訳をされているように、弾正宮とのかかわりで解するのが正しいであろう。弾正宮の生や死を通して、世の無常――それは「ゆめよりもはかなきよの中」という日記冒頭の文に通じる――を語り合い、なぐさめたいという帥宮のこのことばは、ここまでの考察の結果からして、単なる口説のかけひきのポーズというのではなく、なにがしかの真実の心の吐露であったと解される。十月になって和泉に自邸の南院入りをすすめることばの中にも、

…をこなひなどするに★だにたゞひとりあれば、おなじ心にものがたりなどきこえてあらば、なぐさむこともやあるとおもふ也。（P五五）

★にたに、底本かたに、拠条本。応本事たに。

とある。ここにいう「ものがたりなど」が、「をこなひ」云々から

して、世の無常を基調とした、しみじみとした物語であることは確かだろう。勤行でさえも、帥宮は和泉と共につとめることを希っていると読まれる。ついでにいえば、帥宮は勤行と共に日頃から経典の学習にもはげんでいた。日記に、

此ごろは御経ならはせ給ければ、

あふみちは神のいさめにさはらねど法の莚にをればたゝぬぞ　（P八八）

とある。吉田幸一氏[18]は、十二月十五日から十八日までに行われた季御読経のための経典の学習と考えておられる。季御読経は例年の行事で、特に経典の学習を必要とするものではなかろう。季御読経との関係は実際にはよくわからないが、ともかくもこの歌文からは、日頃から機を見ては経典に親しみ学習していた帥宮の姿がうかがわれるのである。

例の出家の意志をほのめかした夜にも、

いさゝかまどろまで、あはれなることを★、このよならずのたまはせちぎる★★。　（P八五）

★　こと、底本ことゝも、拠両本。

★★はせちきる、底本ひちきり、拠両本。

とあって、来世のことまでも、さまざまに語らいちぎっている。帥宮にとって、出家遁世をおもうことと和泉式部を愛することとは、決して相反することでも、矛盾することでもなかったのである。だからこそ、死の予感をうったえる歌も、

呉竹のうきふししげき世中にあらじとぞおもふしばしばかりも

などのたまはせて、人しれずす★ゑさせ給ふべき所などもをきて、……　（P九一）

★すゑ、底本過、拠両本、

という形で後文に続く。「人しれず」以下は宮の女を迎え入れる準備についての記述だから、早く宮田和一郎氏の講義が「人しれず」以下を別段として扱い、竹野長次氏の新釈が「などのたまはせて」を「宮はこんな事を仰つしやった」と訳しているように、「のたまはせて」で文が切れたほうがわかりよい。しかし作者は「て」を用いて、前と後とを流れるように続けている。「ここでポーズをおき、『て』止めとする方が合理的であろう」としながらも「ふたつの心が同一地盤のうえで共存している点を強調して、今は『。』（句点）とせず、『、』読点にとどめておく」とする鈴木一雄氏の解は、基本的に正しい。作者は、死を予感する心と、女を迎える準備にいそしむ心とを、同一線上においているのである。死を予感し、そのかげにおびえるからこそ、女との生活を希っているのだといえよう。浮かれ女というレッテルのかげになりがちな式部の道心については、近時優れた考察が多い[19]。そうした式部の道心とその質の深さを帥宮はよく見きわめていたに相違ない。

長保五年四月の時点で、帥宮が式部についてどのような予備知識をもっていたか、よくわからない。だが、式部との交情を求めるに至った心の動きと、無常感にひたりきり、死を怖れ、仏道にすがり、出家遁世をも希う心とは、深いかかわりをもつだろう。出家は本意であっても、それに踏みきるのは容易なことではない。それに、帥宮のいだいていた無常感や死や悪霊のようなえたいの知れぬ

ものへの怖れは、いくら仏にすがっても、完全に解消しきるものではなかった。兄弾正宮をも喪い、孤独であった帥宮は、みずからの不安やら怖れやら苦悩やらを共有しあい、語りあう相手をひたすらに欲していたであろう。和泉式部への接近は、単なる好色の行為だけではなく、このような意味をもっていたのではなかろうか。後日さらに詳論したい。

注1 (ア)南院考―帥宮敦道親王伝のために―（日本文学論究　二八　昭和45・3）　(イ)敦道親王とその父母―帥宮敦道親王伝の基盤として―（文学・語学　七四　昭和49・12）　(ウ)敦道親王の幼少年時代（平安文学研究　五四　昭和50・11）(エ)敦道親王の結婚（中古文学　一一　昭和48・5）　(オ)帥宮敦道親王伝考―摂関家の庇護下のつれづれな生活―（国学院雑誌　昭和50・2）　(カ)唯詩ヲ以テ友ト為ス―帥宮敦道親王と漢詩文―（へいあん二八国学院大学平安文学研究会▽昭和49・7）

2 1の(イ)参照

3 和泉式部全集（日本古典全集）　解題

4 源氏物語研究序説

5 1の(ウ)に同じ

6 1の(ウ)参照

7 1の(ア)参照

8 小右記正暦四年二月二十三日条他。1の(エ)参照

9 1の(イ)参照

10 右近の尉の存在―和泉式部日記解釈のために―（東書高校通信　国語　六八　昭和43・10）

11 この訂正の理論的根拠については、拙稿　和泉式部日記三系統本の性格　序説（国学院雑誌　昭和36・6）参照

12 角田文衛氏　北山の『なにがし寺』（若紫抄　所収）

13 後藤昭雄氏　敦道親王小考―「属文の王卿」(一)―（国語国文　薩摩路　一五　昭和46・2）　および　1の(カ)参照

14 和泉式部日記の特質（日本文学　昭和38・2）

15 (ア)大橋清秀氏　和泉式部日記鑑賞（平安文学研究　三〇　昭和38・6）　(イ)鈴木一雄氏　『和泉式部日記』に描かれた帥の宮の出家の意志（言語と文芸　昭年39・7）、全講和泉式部日記　考説　三七　(ウ)山上義実氏　『和泉式部日記』における仏教（平安文学研究　五二　昭和49・7）

16 15の(ア)に同じ

17 1の(ウ)(オ)に同じ

18 和泉式部研究　一　第六章

19 (ア)岡崎知子氏　和泉式部の宗教的心情について（平安女流作家の研究　所収）　(イ)岩瀬法雲氏　和泉式部の仏教思想―家集の三つの連作歌から―（中古文学　一二　昭和48・11）など一連の論考。　(ウ)古賀侊夫氏　和泉式部と道心―法華経を中心に―（平安文学研究　五三　昭和50・6）